

淀よどの空そらの下したで南みなみ 浩之ひろゆき

受賞のことば

身内はもちろん知人にも競馬関係者は皆無。競馬と私を繋ぐものは馬券だけ。そんな自分に競馬の何を書けるのだろうかとか若い頃から常に問いかけていました。でもこの齢になり馬券を通じて得た様々な経験、感じたことを素直に伝えることができるのではないかと。今はそう思っています。昨年の佳作に続いての次席受賞。選考委員の皆さまに心から御礼申し上げます。これから精進します。

プロフィール

大阪府出身。大阪市立大学文学部中退。広告代理店でコピーライター、通販会社での企画、編集等を経験。リタイア後は馬券代と孫たちへのオモチャ代を稼ぐためにWワークで奮闘中。思い出の馬はセントシザー。

あと10分足らずでT君を乗せた電車が到着するというのに、私は最初にかける言葉を未だ探しあぐねたまま淀駅の改札口にいた。

彼とは40年ぶりの再会になる。ありきたりな挨拶ではなく、還暦過ぎの年齢に相応しい言葉をかけたが、馬齢を重ねたせいなのか、気の利いた台詞がなかなか浮かんでこない。

今朝「今からこだまに乗る」という短いメッセージが届いた。大学生の頃、東京へ帰省するときも京都に戻ってくる時も、彼がいつも大垣発着の夜行列車を利用していたことを思い出す。じつくりと考えに耽ることができるから。そう教えてくれた。こだまの車中で彼は今日、何に思いを巡らせ、何について考えていたのだろうか。

T君との再会のきっかけは今年の年賀状だった。はがき代の値上げで「年賀状じまい」という聞き慣れない単語が世間を賑わせていた。会社勤めを終えて以来、出す分も届く分も年々枚数は減り続けている。ちょうどよい機会だと私も年賀状じまいをすることに決めた。大学時代の唯一の友人で、年賀状だけの細く永い付き合いになっていたT君にも年賀状じまいの言葉を添えて差し出した。

松の内が過ぎたある日、一通の封書が届いた。差出人はT君だった。

新年早々寂しい賀状がありがとう。お前のような薄情な人間が増え、年賀状印刷の発注も激減したおかげで、この春、家業を閉めることにしました。

便箋の罫線を一切無視した豪快な文字が躍っていた。そういえば彼の実家は下請けの印刷屋だったなと思い起こす。併せて、一つ年下なのに私をお前と呼んでいたことも。もう1枚捲ると、メッセージアプリのIDの横に要連絡の3文字がさらに大きく書かれていた。

IDを登録してしばらくすると、許可してくれたのだろう。スマホがピロンと鳴った。

——久しぶり。電話してくればいいのに。

間髪を置かずメッセージが返ってきた。

——いや、薄情者の声は直接会うまでの楽しみにしておきたい。

苦笑しながらメッセージを送り返す。

——こちらに来る予定でも？

——4月頃かな。廃業手続きで当分は忙しいから落ち着いたら改めて連絡する。

そしてまた1件。

——ぜひ淀で会おう。

積もる話は再会の日までしまっておこうや。短い文面の向こうにそう書いてある気がした。

T君とは大学で知り合った。一浪して合格した私とは違い、都内の有名進学校から現役で入学してきた。同じ文学部で、選択科目もほぼ同じだったため話す機会が多く、会話を重ねるたびに意気投合していった。

私は一回生の秋に大学を中退したが、それでも彼とは頻繁に会い、お互いの近況を伝える仲になっていた。ある日、私が専門紙を携えていることに気づいた彼は「競馬って面白いのか？」と訊いてきた。

「口で説明するより観たら判る。今度、京都競馬場で天皇賞があるから一緒に行こうや」

春の天皇賞当日。GIを現地で観るのは私も初めてだった。現在では考えられないが、昼過ぎでもゴール板前のスタンドに空席を数か所見つけることができた古き良き時代だ。

「ミスターシービーだな」

印の説明を聞きながら専門紙を真剣に見ていたT君はそう言い放った。

「二重丸だらけのシンボルドルフが勝つかもしれんが、強すぎるのは好きになれん」

「俺はどちらも外す。ニシノライデンの単勝勝負。的中したら祇園で飲み倒そうや」

へそ曲がりなお前らしいや。そう言うなり、彼は豪快に笑った。



2周目の坂の上りでシービーが仕掛けた。ミスターシービーが先頭に立ったと場内実況されると、歓声がゴォンという音の塊となってスタンドを揺らせた。各馬が直線に入り、西陽を背にして近づいてくる。逆光で全馬がシルエットになり、何が先頭か見当もつかない。やがて先頭に躍り出た馬が一完歩ごとに影を脱ぎながらゴールを駆け抜けた。ルドルフの完勝だった。レースを観終えたT君は、興奮冷めやらぬ表情で「お前の言ってたことがなんだか判る気がする」と何度も頷いた。

それ以来、T君との競馬場通いが始まった。場外開催日でも私たちはほぼ毎週京都競馬場へ足を運んだ。T君はやがて天王寺のアパートを出て、丹波橋近くのアパートに引っ越した。大阪市の南に位置するキャンパスに通うには遠すぎるのに、競馬場に近いという理由だけで移り住むほど競馬に魅せられていた。

大阪方面からの電車が着き、競馬場へ向かう数名の客が改札口に近づいてくる。春の天皇賞の一週前の土曜日。赤鉛筆を耳にかけた人など誰一人いない。駅も含め昔を想起させる光景はどこにも存在しなかった。しかし、まもなくT君に会えるせいにか、当時のさまざまな思い出は否応なく甦ってくる。

最終レースのあと、祇園で呑める筈もなく、競馬場から旧淀駅に続く狭い道沿いに居並ぶ飲み屋の一軒に入り、焼き鳥を肴に安酒を呑むのが常だった。大人のふりを精一杯しながらの会話は、予想の反省ではなく、自分たちが抱える不安について、だった。

あの頃は二人とも持つて行きようがない苛立ちや焦りを胸の奥にしまひ込んでいた。膨らみ続ける不安に押し潰されるのが怖くて、会うたびに互いに悩みを語った。聞いてもらえば不安は縮む。それだけで十分だった。

私には小説家になりたいという途方もない夢があった。夢が叶わなくなったとき安易にサラリーマンの道を選ぶ

のが厭で、逃げ道を塞ぐために大学さえ中退した。にもかかわらず想い描く自身の成功した姿には程遠かった。それでもお前はいいよな、夢があつて。

T君も悩んでいた。自分が何になりたいのか見い出せないと語った。高校に入学した時は、偏差値の高い大学に入り一流の会社に入つて、ぐらゐの感覚だった。でも、ふと気づいたんだ。俺は何をしたいんだろうって。

私は馬券が的中したときの、僅かな時間だけでも不安を忘れさせてくれる刹那的な喜びを味わうために競馬を観ていたが、馬券を買わない彼はどんな想いでレースを観ていたのだろうか。自分を投影した馬が1着を目指す姿にいったい何を賭けていたのだろうか。

ルドルフが勝つた天皇賞の翌年の11月。その年最後の京都開催の最終日、私たちはいつも通り淀のスタンドにいた。最終レースの本馬場入場を待つ間、私は就職活動を始め、彼に告げた。

文芸誌の新人賞に応募をしては一次選考通過が関の山で、そうした現実には嫌でも目を向けなければいけない時期に来ていた。彼は何も問わないかわりに、俺は一年間休学しようと思つていと呟いた。お前のように退学する勇氣はないから、と自嘲気味に笑つたが目は笑つてはいなかった。彼もまた、何をしたいのかを本気で探す時期が迫つていた。

やがて広告代理店に中途入社し、仕事に追われるようになると、彼に会う機会はめっきり減つた。一年後に復学した彼は、家業を継ぐことに決めたと連絡をくれた。休学中、自分にどう向き合ひその結論を導いたのか。夢を諦めた理由を私に訊かなかつたように、私もまた彼に尋ねることはなかった。やがて彼が卒業して東京に戻ると、私たちの年賀状だけの細い付き合ひが始まつた。

還暦を過ぎてから、折に触れてこれまでの人生を振り

返ることが多くなつた。

スタートで出遅れたぶん、無理に脚は使つたが、いいポジションに付けられた20代。向正面で流れに乗り、意気揚々と先頭集団を走つていた30代。一気のペースアップに従いてゆけず、喘ぎながら坂を上つた40代。坂の下りで後続に追いつかれ、ずるずると後退して4コーナーを回つた50代。そして直線に入り、もう少してゴールに迫り着く60代の自分がある。あのときああすればとか悔やむ気持ちには既にならない。負け惜しみではなく、順位などもうどうでも良かった。若い時分に想ひ描いた自身の姿ではないけれど、今はただ、無事完走できる喜びを素直に噛みしめている。

そしてT君は今、自分の人生を振り返りどう感じているのだろうか。これだけはどうしても聞きたかつた。別々の道で同じ時間を過ごし、懸命に走つてきたであろうこの40年間のことを。

京都方面からの各停が到着し、改札口に向かつてくる一団の中に懐かしい顔があつた。

「白髪だらけになつたな」

自分でも情けなくなるような再会の第一声だった。

「いやいや、お前も同じだよ」

固い握手を交わしたあと、並んで入場ゲートに向かう。

「天皇賞のチケットが獲れなくて悪かつたな」

T君はかぶりを振つた。

「お互い話したいことは山程あるだろ。想ひ出に浸りながら話すには、人の少ない日のほうがちょうどいい」

宿泊先を尋ねると京都駅近くのホテルを予約したと言う。「タクシーなら祇園から千円少しやな。今日こそ大穴当てて祇園で飲み倒そうや」

T君は私の顔を覗きこみ、相変わらずお前らしいやと、豪快な笑い声を快晴の淀の空に響かせた。